

忍者は



そっぴんいた

添牙いろは

僕は、最低の男だ。

齡十〇にして、ずっと大好きだった女のコと結ばれ、彼女との間に息子まで授かった。

それなのに、僕は妻とは別の女性と日常的に身体を交えている。倫理的に許されることではない、という自覚はある。しかし彼女もまた、僕を必要としている。もし僕が見捨ててしまったら、彼女を絶望させてしまうことになる。それを解つていて捨てるほど、僕は薄情にはなれない。彼女に救いの道が示されるまで、僕は彼女の女性性に自身の男性性で寄り添い続けるしかないのだ。

彼女との出遭いは、偶然にしてはできすぎている。まるで、出遭うことが最初から決定づけられていたかのようだ。僕が今の妻と結ばれることが宿命であったように、もう一人の彼女とこのような関係に陥ることも、また宿命だったとでもいうのだろうか。この二人の間でバランスを保つことが、僕に課せられた命題だったのだろうか。

だとすれば、今の僕は決定的に均衡を欠いている。一方と婚姻を結んでなお別の女性とまぐわうなど許されることではない。僕は、結婚などすべき男ではなかったのかもしれない。

複雑な因果関係が絡み合つて今がある。過去の一つだけを取り繕つたところで、人生が大きく変わることはないだろう。

ただ、もし一つだけ人生をやり直せるとしたら……○年前の夏、あの公園での出来事を、なかったことにして欲しい。

忍者はそこにいた

添牙いろは

妻の旧姓は鷹池たかいけ、名は裸足はだしという。変わった名だが、本名だ。

彼女との出逢いは、遡ること十〇の年、僕がまだ〇学二年生の頃だった。当時の僕のライフワークはゲームであり、彼女もまた同じ趣味に精通していた。そんな彼女とゲームに関する議論を交わしていく中で、僕が彼女のことを好きになるのは必然だったといえよう。

だからこそ、他の男の股間に触れさせるなど、我慢ならなかったのだ。

何故そのような奇特な状況になったのか……思い返してみればバカバカしい話だ。最初は、学校の教室でクラスメイトたちと『箱の中身を手探りで言い当てるゲーム』に興じていただけだった。下校の時間に合わせてやってきた通り雨をやり過ごすための時間潰しである。

みんなで交互に出題者と回答者を入れ替えながら進めていくうちに、鷹池が回答する番になった。その時、出題者の大西のヤツが事もあろうに自分のイチモツを箱の中

にぶち込もうとしていやがったのだ！ 当然、僕は即座に止めた。

「やめとけつて。反応は気になるけど」

男として、そのような悪戯心が芽生えてしまうのにはある程度の共感はできるが……と、中途半端な理解を示してしまったのが悪かった。そんな僕に大西は変な気を回してきたのだ。

「もしかして……お前がやりたいのか？」

やりたいか、と訊かれると……やってみたい気もしてくる。男の股間を握った鷹池が慌てふためく様子を、彼女には悪いが見てみたい。今なら大西にそそのかされた、という言い訳も立つ。

何より、好きな女の子に、自分の男であるところを触って欲しい——そんな邪な願望を抱いてしまった。鷹池とは気の知れた仲だし、あとで土下座すれば水に流してくれるだろう。そんな甘いことを考えて、『僕がやる』などと答えてしまったのだ。

トイレでもないところで股間を露出^だすことに少なからず抵抗はあった。しかし、ここでまごついては、それこそ僕の恋心を勘繰られてしまう。意を決して、僕は開いたチャックから手を突っ込むと、隣の大西からも見えないうまく隠しながら中から外へと引っ張り出す。そしてそのまま、箱の側面に開けられた出題物投入口に自分

の下腹部を押し当てた。

僕の痴態を確認した大西はニヤつきながらG○サインを下す。

「それでは、どうぞ！」

何も知らない鷹池は、目を閉じたまま箱の上の穴から中へと手を差し入れる。箱の中の空気を掻き回していた手が、僕の股間に触れた。本人も気づかないほどわずかに掠っただけだったが、それでも僕の性器は興奮を抑えきれなくなってしまった。

「えーと……どこかな……？ あ、コレかな」

ギョッと鷹池の指が僕の先を摘んでいる。

「何だろ？ 変に柔らかいけど……」

中身を知らない鷹池は、五本の指で僕を丹念に揉み解す。他人に触らせたことなんてなかったから、初めての快感に、血流が集まってしまう！

「しかも、何かペトペトしてる……」

好奇心旺盛な鷹池の指が、僕の根本の方に迫ってくる。大好きな女のコが、自分の股間を満遍なく撫でてくれている。例え怒られようが、ぶん殴られようが、この幸福感と引き換えなら悔いはない、とさえ思えた。

「端のあたりに柔らかい毛が生えてて……何コレ!？」

さすがの鷹池も、そろそろただならぬモノに触れていることを察したようだ。ずっ

と床に目を落として手の感触に集中していたが、ゲームを放棄するように僕の方へと顔を上げた。

「お、おう……鷹池……」

僕と目を合わせた鷹池は、状況が把握できていないようだ。よく分からないまま、箱の中身で握った手をシュツシュ、と軽く前後に振っている。

「んっ」

オナニーのような刺激に僕は思わず目を細めてしまった。それで、鷹池はようやく正解を確信したようだ。

殴られる……！ そう覚悟した僕は、鷹池の平手打ちを甘んじて受けるために歯を食いしばる。だが、そんな僕をよそに、鷹池の一撃は一向に飛んでこない。代わりに来たのは、信じられないような一言だった！

「良かったあ……こーちゃんので……」

鷹池は、握っているのが男の股間と知りながら、その手を離さなかった。どこか安心したように目を綻ばせて、モゾモゾとその手触りを楽しんでいるようだ。

予想外のリアクションに、周囲のギャラリも静まり返る。それで鷹池本人も、とんでもないことを口走っていたことに気付いたらしい。

「……も、もう！ 汚いモン触らせないでよね！ 私っ、トイレで手、洗ってくるか

ら！」

汚いモノ呼ばわりしながらも、嫌な顔ひとつせず、鷹池は軽い足取りで退室していった。残された同級生たちは……どうしたものか顔を見合わせるばかりだ。ざわつく空気に紛れて、僕はコソコソと箱の中に露出^だしていたものを仕舞っていく。

如何ともし難い雰囲気の中、内村が外を見て声を上げた。

「おっ、おい！ 雨止んでるぞ！」

そもそも、このゲームは天候回復までの暇潰しとして始まったものだ。雨が上げれば続ける理由はない。

みんな我に返って、帰り支度を始めていた。それまでしていたことなど何もなかったかのよう。

ひとり、またひとりと教室を去ってゆき、僕だけが教室に取り残された。教壇に置かれた出題ボックスの前に佇んだまま、さっきの余韻^{じゆん}に浸っている。もし、鷹池があのまま僕を握りしめてくれたら——あのまま扱き^さ続けていたらどうなっていただろうか。

今し方仕舞ったばかりのソレを、僕は無人の教室で再び箱の中に引きずり込む。そして、箱の上部に空けられた回答者用の穴に自分の手を突っ込み、自分の出題物を握ってみた。それが最初から熱^{あつ}り立っているのは、あんなことがあったばかりだから……

…だろ。うな。

「ん……はあ……」

溜息と共に鷹池の手の平を思い出す。彼女に握られたまま、こうやって……こうやって……！

（これ、何だろう？ 全然分かんないなあ！）

そんな白々しいことを口ずさみながら弄られ続けたら……！

ビュルっ！ ベチョっ。 ビュルルっ!! ベチャァっ！

僕は、箱の中で最後まで果ててしまった……。鷹池のヤツ、気付かなければ良かったのになあ……。

——なんて妄想に浸っている場合じゃない！ 学校の教室で……僕はなんてことをしてしまったんだ！ 誰かに見つかる前に箱を片付けておかないと！

汚してしまった段ボールは中身を付けたまま畳んで、学校裏の所定のゴミ捨て場に放り込んでおいた。バレないよな……？ 大丈夫だよな……？

我ながら外道極まりない悪戯を仕掛けてみたものの、あの様子なら鷹池に殴られることもないだろう。だけど明日、彼女とどうやって向き合えば良いのやら……。

色々悩みは尽きないが……この一件は大切な思い出として持ち帰ることにした。今夜、寝る前に布団の中で彼女に続きをお願いするために。

2

奇しくも、これが僕と鷹池の関係を縮めるキツカケになったのか……は、正直なところ判らない。翌日、鷹池と顔を合わせた時も、彼女も彼女で何事もなかったかのようには振舞っていたから。ある意味、本当に何もなかったんじゃないか、とすら思えた。恐ろしくリアルな夢を見ただけなのかも、と。

だが、それでも良かった。あの生々しい感触と、僕を嬉々として受け入れてくれた微笑み……それだけあれば、しばらくオカズに困ることもなさそうだったから。

あれから半年ほど経ち、本当に夢だったのかもしれない、と過去の思い出になりつつあった十一月頃、何の脈絡もなくその記憶は掘り起こされてしまった。

変な雰囲気醸し出していたのは、僕も認めざるをえない。鷹池の家に遊びに行く

と、彼女の両親は旅行で留守だったのだから。二人きりだと聞かされた僕がつい色気づいた展開を期待してしまったのも仕方ないというものだ。

だからといって……

「前にやった箱のゲームの時、私の番にナニ入れてたの？」

こんな直球で来るとは思わなかった！

鷹池が今更あの日のことを蒸し返した理由は……何と『もう一度触ってみたい』とのことだった。それも、箱で隠さず、直に触らせろ、と。

突然そんなことを言われて、動じるなという方が無理な話だ。女子の方から男子に下半身を露出せ^だなど要求するなど、普通は夢にも思わないだろう。それも、家に二人きり、という状況で、だ。冗談と呼ぶには悪質すぎる。

あまりに急すぎる展開だったので、僕は反射的に誘いを断ってしまった。『鷹池だって、いきなり脱げと言われても脱げないだろう』という謎の詭弁を添えて。

ただ、自分から拒んでおいてアレだが……僕は少し後悔していた。もう一度触ってもらえるかもしれないチャンスを自ら棒に振ってしまったのだから。

これは勿体無かったなあ……と、そんなことを考えていると――

「……こーちゃんが言い出したことなんだからね……？ 途中で逃げたら絶対に許さないから」

鷹池は、自分は脱げる、と断言した。女子が、男子の前で裸になれる、と言つてのけたのだ。それも、ずっと想いを寄せていて、毎晩のようにオカズにしていた女のコが、だ。

彼女は、自分が脱いでいる間後ろを向いている、と言う。これは、服の中からモゴモゴと下着を抜き取るだけでは済まない雰囲気だ。そんな女のコを前に、チャックからイチモツを放り出すだけで許されるはずがない。鷹池の裸を拝めるのであれば、どんな恥だつて受け入れよう、と意を決して、ズボンとパンツを脱いでしまった。

下半身を放り出した僕は、膝を畳んで小さくなつていた。もうすぐ鷹池の裸を……女のコの胸を見ることができる……！ そんな期待にはち切れそうな股間を押さえていると、背後から用意ができたと言われ、鷹池に告げられた。しかし、僕が振り返つたその先に立っていたのは……ブラだけを残した女のコだつた。

勿論、下半身に興味が無いわけではない。だが、一番期待していたところだけをピンポイントに隠されてしまった僕は思わず……

「下かよ!？」

ついそんな素っ頓狂な声を上げてしまった。彼女が言うには、僕に下半身を見せるよう頼んだのだから、自分も下半身を見せた、とのことだ。女のコとて、胸でなければ恥ずかしくないはずがない。むしろ、下の方がある意味キツイ。それなのに期待ハ

ズレかのようなリアクションをされては、ムカッ腹が立つのも当然だろう。

「これでいいでしょ！ 文句ある!？」

鷹池は最後の一枚をも脱ぎ捨ててしまった。同い年の女のコが、目の前で自ら全裸になってしまったのだ。その上で、恥じらうこともなく、異性である僕に迫ってくるのだから、僕にはもう、何が何だか解らない！

「こーちゃんも脱ぎなさいよ！ 上もっ！ 全部！」

そこからは……その勢いのままに上半身まで脱がされて、互いの身体に触れ合って、そして……想いを交わし合った。こうして、僕たちは晴れて恋人同士になれたのだ。た。

唐突に念願が叶って、僕は夢心地の中にいた。とはいえ、この歳で子供を作るワケにもいかず、子作りを周囲が認めてくれるとも思えず。それで、鷹池とは密かに付き合っていくこととなった。性を交える気持ちよさを知ってしまった以上、今更プラトニックな関係に戻るはずもなかったのである。

3

これは鷹池の性癖なのかもしれないが、彼女は僕とのセックスの際、どうしても裸になりたがった。性器だけを露出させて交えるのではなく、肌と肌による触れ合いを望んでいたようだ。その想いは彼女の身体からも明らかで、きちんと脱いでいる時とそうでな時では、僕たちの昂ぶり方は全く違っていた。

僕は何とか彼女の願いを叶えたいとは思いつながらも、それは容易なことではなかった。僕たちの関係が親たちにバレて以来、互いの家で二人きりになれる機会は皆無になったと言っている。絶えず監視の目を光らせ、一線を越えないように踏み込んでくる。かといって、子供だけでホテルに泊まることは難しいし、外で裸になるような危険行為はそうできるものではない。

それでもトイレの個室や放課後の教室など、人目の少ない場所で誰も来ないことを祈りながら僕たちは全ての衣服を脱ぎ捨て、肌を重ね合った。

そんな綱渡りのような関係が続けていくうちに季節は巡り、交際が始まってから二年目の夏——それこそが、後に振り返って僕の人生のターニングポイントとなった

『三年前の夏』だ。

.....

高校に上がった最初の夏休み、自宅の近所で盆祭りが行われることになった。鷹池からは当然のように一緒に見物に行こうと誘われていたが、その際に付け加えられた頼み事の方に、僕は強く興味を惹かれていた。

『浴衣で来てね。但し……下着は着けずに♪』

裸に浴衣だけで祭り屋台を練り歩く……だけで済むはずがない。昼間は人通りが多くとも、夜になれば誰も寄り付かなくなる秘密の場所……鷹池は、それを見つけたのだろう。

だから、明るい祭り囃子の中でも……僕は彼女の浴衣の中身が気になって仕方がなかった。彼女の方も、ずっと僕の下腹部に目を落としている。最早、夏祭りなどただの前戯だ。本番はこのあとから始まるのだろう。

街から人が引き始めた頃、僕は彼女に連れられてとある公園に来ていた。そう広くない敷地だったが、ここの公衆トイレはドツシリと構えられている。ここの裏手なら、街並みから隠れるのに最適と言えそうだ。

ここで僕たちは腰帯を解いて、浴衣を肌蹴させる。僕の身体の中心線が頭になると、彼女はすぐさま胸の中に飛び込んできた。そして、お互い自分の身体で、相手の身体の熱を確かめ合う。だが、こうして恋人の肌触りを堪能するだけで終わらせるつもりなど、僕も彼女も考えていない。

一旦抱擁を解くと、するつと浴衣を落とした彼女が深みを求めてお尻を突き出してくる。その細く括れた腰に僕は両手をあてがい、二人が求めている場所へと自分を潜り込ませていく。

「あ……ふああ……♡」

最初は、このようなどころでおっ始めてしまうことに少なからず不安もあった。しかし、こんな甘い声を聞かされては、余計な心配など吹き飛んでしまう。

避妊することも忘れて、僕は鷹池の腔内なかで最後の最後まで甘えてしまった。

それでも……

「工祐え……大好き……」

こんなことを言われては、もっとも彼女のことを好きになってしまったのだった。

翌週末、夏祭りも二度目ともなると、僕たちに迷いはない。自らの帯をシュルリ、シュルリ、と解いていくと、はらりと浴衣を土の地面に脱ぎ落としてしまう。そして、

そこが個室であるかのようになつて夢中になつて恋人の身体を貪るのだった。

しかしその次、三度目には……彼女の欲求はより大胆なものになつていた。

「ね……今夜は前から抱いて欲しいな……♥」

こんなところで横になつては、浴衣が泥だらけになつてしまう。どうするつもりかと思つたが……何と服を脱いだ彼女はトイレの裏から裸のまま街灯の差す表へと飛び出してしまつたのだ！ 彼女が向かつていったのは広場の脇に据えられていた背もたれの無い正方形のベンチ。そこに仰向けに寝そべると、大股を開いて僕を誘うように自慰を始めてしまつた。

あえてライトアップされた台座に横たわり痴態を晒す彼女は暗い公園内ですこぶる目立つていた。危ういことには間違いないが、僕がここで立ち竦んでいても何も解決しない。そう思つて彼女の元へと駆け寄るが、僕の頭はすぐさま彼女の両腕によつて絡め取られてしまつた。そして、そのまま唇を奪われては……もうそれ以上自分の気持ちを抑えられそうにない。求められるままに舌を這わせ、彼女の敏感なところを指で摘み上げ、そして……ひとつになつていた。

「工祐……大好き……大好き……！」

彼女は子宮おくを撞かれる度、蕩けるような笑顔を魅せてくれる。こんなの止められるはずがない……！！

「工祐！」

「裸足！」

ドツ……ドクンツ……ビュルっ、ビュルっ……

こうして彼女に包まれながら、最高のひと時に酔い痴れるのだった。気持ちいい、だけでは済まないことは解っている。だが、この快感の果てに子供ができたとしても……その時はその時かな、と不安も後悔もなくなってしまうのである。

二人の気持ちを共有するため、僕たちは口付けを交わす。しかし——

「……………!?!」

鷹池の首が僕たちの繋がりを引き千切るように拗じられた。そして、傍の茂みをじつと睨んでいる。続いて聞こえるザザっ……という草木を掻き分ける物音。この段になって、僕もようやく気がついた。これは、まさか——

——覗かれた……!?!

温かな安らぎはすっかり冷めてしまった。僕は股間を鷹池から引き抜き、裸の彼女

をかばって前に出る。そして、鷹池が逃げるための時間を稼ぐため、怪しげな茂みに向かって一歩ずつ間合いを詰めてゆく。

「鷹池は、服を着てすぐに公園から離れるんだ……!」

タタタツ、と地を蹴る音が離れていくのを聞いて、僕はそれとは逆方向に慎重に近づいていく。そして、何者かがいたと思われる場所を覗きこむと……!

……そこには、誰もいなかった。少なくとも、裸のまま襲われる心配はなさそうで、それには胸を撫で下ろす。しかし……そこに誰かがいた痕跡は確かに残されていた。

橙色の携帯電話……。これで僕たちの情事を盗撮していた……!?

これを鷹池が知ったら——撮られていたのではないか、それは既にメールで別の端末に送られていて、拡散してしまうのではないか——そんな心配を、彼女に掛けたくはない。

裸でこんな明るい色の携帯を握りしめていては、これの持ち主が戻ってきた瞬間に気付かれてしまう。浴衣を着てから回収するつもりで、僕は一旦ソレを傍に設置されていた屑籠の中に投げ入れて隠した。いい感じにゴミが溜まっていたので、そこに上手く紛れ込んでくれたようだ。

そして、確かな足取りで浴衣を取りにトイレ裏までやってくる……

「こーちゃん!」

そこには、全裸の鷹池が浴衣を握りしめたまま蹲っていた。

「逃げろと言ったのに……裸で何してんだ」

無事だからこそではあるが……鷹池がそこで待っていてくれたことには、やはりほのかに嬉しさを感じていた。

「私だけ服着て逃げられるわけじゃないでしょ！」

飛び上がるように抱きついてきた彼女を慰めるために、僕も彼女を力強く抱きしめる。

「もう大丈夫だよ。誰もいなかったし、何もなかった。猫でも逃げたんじゃないか？」
鷹池の髪を撫でながら、僕は彼女を想って嘘をついた。

「そう……？ そうなんだ……良かった……」

もう彼女は震えていない。僕を信じて心の平穏を取り戻してくれたようだ。ならば……あの携帯に何が写っていても、最後まで無かったことにしなくてはならないだろうな。

「ね……こーちゃん……ちよつとだけ、不謹慎なことゆっても……いいかな？」

改めて向き合った鷹池の瞳は潤んでいた。しかし、そこに恐怖の色はない。だからこそ、言えることなのだろう。

「さっきのこーちゃん……すつごくカッコ良かった……♪」

そう言ってもらえるなら、身体を張った甲斐があったというものだ。しかし、この面と向かって言われると……照れてしまうな。鷹池自身も恥ずかしくなってきたようで、僕からの返答を遮るために唇を唇で塞いでしまった。

あんなことがあった直後に呑気なことだが、僕たちはまだ服を着ていない。そして、肌と肌を絡ませながら、唇を、舌を合わせてしまったら……！！

「こーちゃん……工祐……私、また、欲しくなっちゃった……♡」

鷹池はするりと力なくしなだれると、日陰の湿った土の上に、先ほどのベンチの上と同じように寝転んでしまう。

「鷹池、汚れるぞ……」

そう心配してみるも、

「もう遅いもん♪ 工祐も……ほら……」

服を汚さず、身体だけ汚しては、外で裸になったことがバレてしまう。が、こうなつては、彼女の言うとおりの手遅れか。

先ほどの場所よりは安全だが、こことて全く安心できる場所ではない。しかし、彼女が求めるのなら……愛し合うべき場所なのだろう。

さっきの携帯電話のことはあるが、今は周囲に何の気配もない。今は彼女が欲するままに、自分の欲しいものを抱きしめていたかった。

4

こうして二度目のセックスを終えると、浴衣を着直す前に、鷹池が持っていたハンカチを濡らして、互いの身体を綺麗に拭いた。考えなしにあんなところで横になったわけでもなかったようだ。

そして身なりを整えて公園を後にし、鷹池を家まで送り届けると……僕は全速力でいま来た道を引き返す！

息を切らせながら例のゴミ箱を漁ると……あった！ 橙色の携帯電話！ これに何が写っているかは判らない。だからこそ、僕には何としてもこれの中身を確認する必要があるのだ。もし、全くの無関係なら申し訳ないことだが、僕はこの落とし物を浴衣の中に隠して持ち去った。

もしロックが解除できなければ、送信の可能性はさておき、端末だけは物理的に抹消するしかない、と考えていたが……不用心なことに、全てのファイルはそのまま覗くことができてしまった。隠しファイルにもなっていない。画像はデフォルトのディレクトリに堂々と格納されていた。

結論から言えば……先ほどの行為は完全に覗かれていた。僕たちが愛し合う様はしっかりと写真として収められており、顔も識別できるほど大きく写り込んでいる。この携帯が持ち主の手から零れ落ちてしまったのは不幸中の幸いといえよう。

しかし、覗かれていたのは僕たちだけではなかった。同じ場所——あのベンチの上では、何組ものカップルによって似たようなことが執り行われていたようだ。考えることは誰しも一緒、ということか。つまり、あの公園はいわゆる「青姦」の名所であり、これの持ち主はそれを狙って待ち伏せていた、ということだ。僕たちは、覗き魔の網にまんまと引っかかってしまったのである。

それだけなら腹いせに携帯電話をメチャクチャに破壊してゴミの日に出してやるどころだが……僕にはどうしてもそれができなかった。

確かに、僕たちを含めた無警戒な男女のあらゆる姿が、この携帯電話によって何枚も隠し撮られている。しかし、それはごく一部に過ぎなかった。その十倍、二十倍にも及ぶ多量の画像がこの端末には保存されており、そこに写っているのは全て同じ人物だったのである。おそらく、この携帯の落とし主だろう。その殆どは自撮りで、一生懸命腕を伸ばして自分で自分をカメラに収めていた。

この携帯の所有者は可愛らしい瞳をクリクリさせた女のことで、多分僕より年下だ。髪を両脇高めで結び、うさぎのように垂れ下げている。

制服でも着ていってくれば身元を調べる糸口になったかもしれないが、そのような写真は一枚もない。様々な季節に、様々な場所で撮ったようだが、写真の中の彼女は全て同じ格好だった。青々と茂った新緑の前でも、寒々しく枯れ落ちた紅葉の前でも、川辺でも、コンビニの前でも、歩道橋の上でも、彼女の姿は変わらない。彼女は、何も着ていない。僕たちのように盗撮されたのではなく、自らの意志で、自らの手によって、一糸纏わぬ自らの裸体を撮影していたのだ。少し傾けたキメ顔で、確信的に自分の両胸まで入れている。中には可愛らしいフレームで飾られた画像もあった。彼女は、自分の裸を写すことを心から楽しんでいたようだ。

そんな上半裸の中に、時折全身像が混じっていた。学校の教室やどこかの倉庫など、比較的余裕のある場所では引き気味のアングルで撮ることができたようだ。膨らみかけの弱々しい乳房も、剃ったり生えたりを繰り返している陰毛も、そして、その内側に通った一本の筋に至るまで、これ見よがしに魅せつけられていた。

それは、美術的なモデルのようなポーズだったり、股間を広げただけの男性向けポルノのようだったり……様々な彼女が惜しげも無く肢体の全てをカメラの前に曝け出していた。

僕は、そんな裸たちの数々に自分を抑えきれなくなり……鷹池には悪いと思いがながらも、股間を弄らさずにはいられなくなっていた。見知らぬ少女に向けて、僕は込み上

げてくるものを……ピュルツ、と射精^はき出してしまったのだ。鷹池と付き合い始めてから、他の女で射精^ぬいたことなんてなかったのに……。

とりあえず、保存されていた画像は全て、パソコンの方に吸い出し、端末からは、彼女以外の写真のみ削除させてもらった。

続いて、持ち主の個人情報も探ってみる。名前は……きの子？ 姓は空欄のままだった。メールの方も確認してみるが、少なくともあのタイミング以降に送信された形跡はなさそうだったので、それ以上の詮索は不要とした。その他、ファイルを無線で送れるようなアプリも入っていなかったし、この件は一先ず解決したと考えて良さそうだ。

もうこの携帯に用はない。念の為に破壊した方が良いのかもしれないが……僕には何故か、それができなかった。

5

不本意な形ではあったが、鷹池に対して後ろめたい秘密ができてしまった。

彼女とセックスする機会を得られずムラムラしてくると、僕はついこの携帯電話を開いてしまう。すると、自らを慰めずにはいられない。恋人ではない女のコに対して、僕は欲情していたのだ。

毎年のことだが、夏休みの鷹池は家族旅行に出掛けることが多いため、その間、僕は著しく暇だった。彼女に逢えない間だけだから……と自分に言い訳をして、僕は事あるごとに例の携帯を開く。そして、抑えることなく煩惱を開放させていた。収録されている写真の数は膨大で、何度射精しても僕を飽きさせることはなかった。

今日も朝起きて挨拶代わりに一度、朝食後に二度目、昼食前に三度目……と立て続けに射精^めが続けていた。

昼食の後片付けも済んだ昼下がり、アレだけ眺めていたにも関わらず、またしても股間が悶々と勃起^たち上がってきた。今度は……交番の前で撮られたあの写真を見てみたいな。あんな際どい場所で裸になるなど、常軌を逸している。しかし、それに挑む彼女の顔に不安の色はない。それどころか、自分の勇姿を誰かに見て欲しい……そのようにすら感じられた。

早速引き出しの奥から例のオレンジ色の端末を取り出し、あたかもポルノ雑誌を捲るかのよう蓋を開けた、が……それが携帯電話だったことを、今更ながら思い出さ

せられた。

“不在着信1件 留守番電話あり”

これには背筋が凍りつく。誰からだ……？ 彼女の知り合いから……か？ 恐る恐る確認ボタンを押してみると……その相手は『自宅』だった。つまり、彼女の家の電話からである。

『泥棒！ 私の携帯を返せ！』

『お前の家の場所は分かっているぞ！』

『写真は既を送信済みだ！ ばら撒かれたくなければ——』

どのようなメッセージが入っていようと、冷静に対処しなくてはならない。最悪、警察に相談する可能性もある。鷹池が旅行中で本当に良かった。彼女が帰ってくる前に、僕が全て片付けておかなくては。

脳内であらゆる可能性を想定し終えた僕は、留守電の再生ボタンを押して受話器に耳をつける。

「……もしもし、コ、ス、ケ、さ、ん……ですか？ あたしは、きの子です」
きの子……この携帯の落とし主だ！ これまでその素肌を隅々までこの目に焼き付

けてきた相手が僕に下を名前と呼びかけている……これに僕は、不覚にも胸をときめかせてしまった。

しかし、名前まで割れているとなると油断はならない。気を引き締めて耳元に集中すると、自然と受話器を持つ指にも力が入る。

「今夜二時、あの公園まで来ていただけますか？ お待ちしております」


わた

プツツ、と録音はそこで切れた。あの公園……祭りの夜、鷹池と三晩に亘って身体を交えた例の場所で間違いないだろう。そして、彼女の目的はこの携帯の返却。それ以外に考えられない。

これは、罠である可能性が非常に高い。とはいえ、こちらにも武器はある。この携帯に収められていた写真の数々……。それらは全て自宅のパソコンにバックアップ済みだ。もしもの時は、それをチラつかせれば、一方的に畳み込まれることはないだろう。

しかし、そんな複雑な事情を抜きにして……僕はただ、彼女に逢ってみたかった。

純粹に彼女の裸に性的な魅力を感じていたのは間違いない。ただ、僕の心に引つ掛かって離れないのは、その表情だった。とても楽しそうなのに、どこか寂しそうな画面の向こうに何かを訴えかけるようなその瞳が、どうしても忘れられなかったのだ。



きの子の誘惑の手が
輝山を捕らえようとしていた頃、
鷹池裸足は何も知らずに
恋人との子作りに全力で励んでいた。
そして、ついに念願叶って
愛息子を授かった……が——

気付いた時には、全てが遅すぎたのである……

忍者なんて
いなかった

各サイト様にて**健気**に配信中!

どこでも服を脱ぎ散らかす
裸族少女・きの子
愛する男の子供を孕みたがる
年中発情期女・鷹池
この二人が一人の男を取り合う
やたらとエロいライトノベルです

裸族忍者シリーズ

<http://soekiba.net/ninja/>



彼女は忍者をまちがえている

部活の再建のために近づいてきた
輝山の後輩・きの子。
だが、彼女の有り様は謎めいており
とても部のためだけとは思えなかった。
彼女に呼応するように
幼馴染・鷹池も動き出し……



とある忍者の恋色絵巻

『～まちがえている』の
きの子視点の物語。
水面下で行われていた
鷹池との罅迫り合いと
裸族としての脱ぎっぷりが
彼女の口から語られる！



忍者は浮気を許さない

『～まちがえている』の
パラレルワールド的物語。
些細な行動の食い違いから
彼らの歯車は狂いだし……！？
三角関係は痴情の限りを尽くす
泥沼へと嵌り込んでいく！

テロリスト
迫り来る**反逆者!**
プリンセス
担がれる**民間人!**
そして……

アホの
掻き乱す**問題児!!**
コ

兄は首相官に
妹は金銭殺刑に

妹はお風呂嫌い
女王は珈琲が大好き

ヒロインたちと性的な意味で
身体を交える番外編!
18歳未満の方はご購入できません

詳しくはWebで
<http://soekiba.net/astra/>



僕と私の
The diary of Sleeping under the stars for Ours
露出日記

どこか
野外で繋がる
はだか
露出の絆

スピンオフでも
野外で全裸!

わたしとあなたの
露出交換日記

詳しくはWebで

<http://soekiba.net/outdoor/>



ゲーム会社でうつつた
ゲーム

ゲームって
……ナンだ!?

ただシナリオを追ってだけで
ゲームと呼べるのか?

ボタンを連打するだけでゲームなのか?

そもそも、ゲームとは一体何だったのかを
考える一冊です。

詳しくはWebで

<http://soekiba.net/game/>



空色書房

Sleeping under the sky